

1年コース多文化コミュニケーション授業の再考と新展開 —環境問題を題材として—

宮城 徹

(2007. 10. 31 受)

【キーワード】 国費学部進学留学生、予備教育、多文化コミュニケーション、環境問題、高校との交流授業

1 はじめに

本センターでは、国費学部進学留学生（1年コース留学生）に対し、1学期（4～7月）毎週金曜日4時限目に、「多文化コミュニケーション」という授業を実施している。本稿では、これまでの授業の内容を概観した上で、本年度筆者担当クラスで実施した環境問題をトピックとした話し合いの成果と反省点について検討する。

2 歴史的背景

これまでのセンター年報を紐解くと、当該科目は、1994年度に開始された「異文化心理学」が、1999年度以降、「多文化コミュニケーション」と改称され、現在に至っているようである。「異文化コミュニケーション」という言葉に比べると、まだまだ馴染みの薄い言葉ではあるが、現在「多文化共生」「多文化多言語」という表現がふさわしい状況が生じている社会において、「異文化」という表現の多くが「多文化」という表現に置き換わろうとしているのは確かなことである。そのトレンドを20世紀末の時点で把握できたのは、本センターでは留学生が数多くの国から集まってきた（1999年次、2007年次共に27カ国）、日本を含む世界の多くの地域で起こりつつある国際化や多文化多言語社会化を、日本の中では先取りしていたからだと言えるだろうし、こうした状況を理解し、改称を行った担当者（鈴木康明元教員、小松由美教員）の先見の明とも言えるだろう¹。

¹ インターネット上でも近年になって、「多文化コミュニケーション」という表現が増えてきた。脇田（2003）によると、福井大学でも1995年にそれまでの留学生を受講対象とした「日本事情」を、日本人学生にも開放するために「現代日本事情」とし、さらに1999年に「多文化コミュニケーション」に変更したという。

さてその授業は、旧キャンパス（住吉町）時代には、1年コース留学生全員が集まる唯一の合同授業であったが、2004年2月の朝日町メインキャンパスへの移転後の同年4月からは、全員を2クラスに分け、小松教員と筆者が学期を通じ、一方のクラスを担当するという形を取るに至っている。それに伴い、二つのクラスでは、授業内容がやや異なってきたが、日本での生活への適応、センターの授業や多文化状況への適応を促すためのアクティビティを行ったり、課題を与えたりしていることでは一致している。たとえば学内、学外のフィールドトリップ、小学校や高校との交流授業、TOFSIA 学生²による授業支援などであるが、これまでの中心となる活動は各留学生による「自文化紹介プロジェクト」であった。ここでは留学生が国ごとに分かれ、5～10分程度の持ち時間で、自国の特徴的要素（地理的特徴、人種的、民族的特徴、生活ぶり、国家的イベント、料理、服装、芸術など）について英語（一部日本語を含めてよい）で紹介し、他国からの留学生は発表に対して、様々な質問やコメントを行うというものである。

3 自文化紹介プロジェクトの意義と問題点

「自文化を紹介する」という活動は、様々な「国際理解」、「異文化交流」場面で広く用いられている。われわれは初対面のとき、自己紹介を行うが、これは自然なことのように思われる。単なる儀礼という場合も多いが、自己紹介をすることによって、互いの共通点や接点を見出して、話を円滑に先に進め、より相手を理解するためともいえるし、その場の雰囲気や硬さや気持ちの「不確かさ」(uncertainty)を減少させて、お互いの心理的状況をより心地よいものにしようとするためとも言えるだろう。実際、筆者のクラスでも、授業第1回目のクラスでは、キャンパスから歩いて15分ほどに位置する野川公園にでかけ、円陣を作って、自己紹介をし、ゲームやオリエンテーリングのようなことを行って、メンバーの融和を促進しようとしている。ではそこから一歩進んで、「自文化紹介」を行うようになった背景は何であるか。それについては、定かではないが、次のようなことが関係しているだろう。

- (1) 他文化からの訪問者（ゲスト）を理解するためには、その文化について知ることが重要であり、その文化について学ぶには、その文化をよく知る者、できればその文化の出身者であるその訪問者から説明を受けるのが適当である（ホス

² TOFSIA とは本学学部学生による国際交流サークルで、4月の新入生の入寮手続きから翌年の修了式まで、1年間を通じて、本学留学生との交流活動を繰り返し広げている。本授業にも毎回数名が参加し、意見交換を行ったり、プレゼンテーションを行ったりしている。

ト、あるいは聞き手のニーズ)。

- (2) 自分を理解してもらうには、自分の背景にある文化を理解してもらうことが大切である。そのために自文化について説明をし、理解を求めることは大切である(ゲスト、あるいは話し手のニーズ)。
- (3) 受講生は国費学部進学留学生であり、熾烈で厳正な採用試験に合格した各国の代表者であり、将来国を背負って立つエリートである。したがって日本に留学中、何度も自文化について紹介をして欲しいと依頼されることになる。そのときに備えて、何をどう語るか、練習を積んでおくことが望ましい(役割期待に応える)。
- (4) 日本語学習においても、自ら語りたいことを語れるようになるという動機付けが重要であり、そのためにも、まずは自分の身の回りのこと(自文化のこと)について語れるようにすることが手っ取り早く、かつ大切である(日本語学習者としてのメリット)。
- (5) 自文化紹介で多用される「お国料理」「民族衣装」「音楽や踊り」などからも明らかかなように、他文化を理解したり、自文化を紹介したりする際に、きっかけとしてこれらの明白な文化的要素³を用いることは、比較的实施しやすく、コンフリクトも起こりにくく、参加者全員が楽しむことができる(教員としての扱いやすさと有益性)。

つまり、「自文化紹介プロジェクト」は自己紹介の延長として、自分の文化の紹介ができ、話し手にとっても、聞き手にとっても、授業担当者にとっても来日直後の授業内容として有益な活動なのである。事実、毎年、受講した留学生の反応(フィードバック)は好意的であるし、筆者自身、過去に聞いたことのある国の発表であっても、新たな発見をすることも多い。またこの多文化授業最終回では、高校に「交流授業」に出かけ、そこで日本人高校生に対して、同じ発表をより日本語を織り交ぜる形で実施させているので、クラス内での発表は最終回の高校での発表のリハーサルとして、またはその後の授業などにおける日本語での発表の前段階として位置づけられ、効率的な授業と考えられていた。

³ 初出は明らかでないが、これまで「文化は冰山」というメタファーがよく使われてきた(Weaver, 1986)。海水面に出ている部分よりはるかに大きな氷が海水面下に存在する冰山のごとく、文化には目立つもの(たとえば、言語、衣装、食事、年中行事など)よりもはるかに大量な普段は見えていないもの(価値観、行動規範、人間観など)が存在するという考え方である。

しかし同じアクティビティを5年以上繰り返してきた筆者は、そろそろ内容を再検討すべきではないか、と感じるようになった。そのきっかけはいろいろあるが、次のようなことが関連しているだろう。

第一に、留学生による発表の準備の仕方が変わってきたことである。2000年頃には、留学生が使用できるパソコンは限られており、インターネットへのアクセスも難しかった。したがって彼らは、図書館や大使館から資料を得たり、先輩から衣装や楽器を借りたり、料理を手作りしたりと、手間暇をかけて準備していた。だが現在の留学生は、図書館や自室で自由にインターネットを利用できるので、そこから写真や図表だけでなく、ビデオ映像までもダウンロードし、安易に教室に持参できるようになった。

これは当然、発表の仕方にも影響し、PowerPointを使う学生がほとんどになったこと、これが第二の理由である。これによって明らかに情報が正確に聞き手に伝わるようにはなったが、内容よりも提示の仕方の上手下手が聞き手の関心事になり、インターネットの情報を単に並べる発表になってきたように思われる⁴。これらによって、以前のような、現物を手にとって見る、味わう、といった醍醐味と感動が薄れてきたような感覚、「発表者はここにいる留学生だが、大部分の内容の製作者はプロフェッショナルで、別の所にいる」といったさめた見方が筆者の中に生まれてきたのである。それは同時に、留学生のオリジナルの意見に出会うことが減ったような感覚も生み出していた。

第三の点は、これはさらに大きな問題をはらんでいるのだが、「文化」をどう理解するかということである。まず留学生に文化紹介をさせる多くの場合、それは前述のように、「明白な文化的要素」かつ「紛争や不和を生み出さない楽しい内容」を期待している。たとえばそれは食べ物であり、衣装であり、演劇であり、スポーツであり、楽器である。しかし現代日本におけるそれらを考えれば明らかのように、そうした「代表的な文化的要素」は庶民の生活を反映したものではなく、象徴的な存在として扱われている場合も多いと考えるべきであろう。たとえばモンゴルからの

⁴ 上記2点については、これまで「最終回の発表を行う高校や皆さんが今後、自国の紹介を迫られる場面では、パソコンやプロジェクターは使えないことも多い」「データを教室のパソコンに移そうとしたり、自分のパソコンを教室のプロジェクターに接続したりすると、なかなかうまくいかず、持ち時間がなくなってしまう」などを理由として、パソコンやインターネットには頼り切らないようにという注意を繰り返してきた。しかし筆者の中には、「日本人学生は留学生に比べて、プレゼンテーション能力が劣っているし、パワーポイントにも疎すぎる」という思いもあり、パソコン使用厳禁とはできなかった。

留学生はゲルでの生活や馬頭琴の話をしてくれるが、彼らのほとんどはゲルで生活したことはないし、馬頭琴を演奏できるわけではない。しかしある国の文化の代表的側面と言ったとき、そうした伝統的なものが提示されるのは決して珍しくない。

一方、私たちがこれまで「日本事情」授業などで扱ってきた「日本文化」と呼ばれるものの内容をもっと見直していこうという動きは、本授業と並行するかのようになり、2000年頃から活発に行われてきた。たとえば、本センターで作成された『日本事情テキストバンク』は扱った領域の広さから、実は何を扱っても「日本事情」となりうることを示している。また季刊誌『21世紀の日本事情』は1999年から2004年にかけて出版され、さまざまな議論が行われた。その流れとして重要な点は、これまで私たちは、ともすると文化というものを固定的に捕らえがちだったが、実は一口に日本文化（あるいは自文化）と言っても、私とあなたでは大きく内容も理解も異なる、そして同じ個人でもその認識は毎日変化している、ということを確認したのである。そうならば、留学生は留学生で、自らの目で、日本文化（あるいは自文化）の現状とダイナミズムを柔軟に理解する必要があり、そのために担当教員は努力すべきである、ということになる。

ここでは、これまでによく指摘されてきた「安易なカテゴリー化、ステレオタイプ化」ひいては「自文化中心主義、文化の序列化」の発想を避けようという考え方も働いているが、それにとどまらない。つまり日本事情教育においても日本語教育においても、日本や日本語に関する知識と日本社会や日本文化に適應するためのストラテジーを学習することが求められているが、それによってこれまで留学生が身につけてきた自分を主張する表現が奪い取られている可能性があることも指摘されたのである。こうした点を踏まえて考えると、確かに自己紹介の延長で自文化紹介をさせるのは、さまざまなメリットがあるが、同様に問題点も生み出しているといえるだろう。

第四に、「留学生、特に国費留学生は、各国の代表者（市民大使）」という発想が、現実と乖離し始めているという点である。それは留学生数全体が増加したこと、日本への留学自体が決して特殊ではなくなった国が増えたこと、日本への国費留学生が必ずしもその国のトップレベルの人材ではないことなどから考えると、明らかである。実際に彼らと話をしてみると、多くの者は、個人として留学して来ているのであって、「母国の代表者として、一生懸命勉強し、卒業後は国に帰って、国の発展に全力を尽くしたい」と胸を張って語る者はほとんどいない。彼らの中には、「私は自分個人の意見を言っているに過ぎないのに、それを自分の国の人たちの代表意見

と思われることには納得できない」と主張する者もいる。これは至極当然の意見に思われる。彼らはもちろん他の多くの私費留学生と比べ、待遇面で恵まれており、特別扱われることをある程度覚悟する必要がある。しかし日本国奨学金制度は、受給者の将来の職業や社会での役割まで規定しているわけではない⁵。むしろ、留学生のその後の暮らしぶりは、まことに広がりがある⁶。

さらに以下のようなこともあった。その留学生は、香港出身者で、中国と英国のパスポートを持ち、豪州の永住権を持って、豪州の全寮制の高校に留学し、豪州で選抜されて日本にやってきた。彼に豪州の話をしてもらおうとしたら、「僕にはできません。ずっと寮で生活していて、コアラとカンガルーさえ、見たことありませんから」と答えた。この話は笑い話で済まされない、大変示唆に富んだ話である。日本人には二重国籍が認められていないが、世界では多重国籍者が存在していること、そうした多国籍留学生の「母国」への帰属意識は、日本人とは異なることが予想されること、この留学生が豪州から選抜されて来ているとしても、豪州の代表という意識はほとんどないこと、またそれが当然であること等⁷、マルチプルアイデンティティに関わる様々な問題がここにはある。

以上のようなことを総合して考えると、留学生が変わり、教員の認識が変わり、留学生を取り巻く環境が変わった現在、全員一律に、5～10分間で、自国紹介をさせるということに、「これがベスト」と胸を張って主張するほどの根拠はない、という気がしてきたのである。もちろん自国紹介の経験をすることも必要であろうが、それを多文化コミュニケーションの中心的活動としなくても良いのではないだろうか。そのような理由から、別の方向性を模索してみようという気になった。別の言い方をすれば、出身国を超えてつながり合えるテーマで話をするという作業はできないものかと考え始めた。

4 新しいトピックとしての環境問題

本年度は環境問題を取り上げてみたらどうかと考えたのには、以下のような背景

⁵ 出身国によっては、卒業後に公務員になることといった条件を設けている国もある。

⁶ 筆者は修了生名簿の整理、追跡調査を行っているが、世界各国に広がるネットワーク、職種や活動内容の多様さには驚かされる（宮城、2007）。

⁷ 何らかの理由で、出身国について語りたくない留学生もいる。ある留学生は「国にいたくないので、日本に留学した」と告白した。

があった。つまり、現在ほど日本人が環境問題に敏感になっている時代はなかったかもしれない。マスコミにおいても、日常生活においても、環境に関する話題が出ないときはない。「異常」気象が異常とは言えないほど頻繁に起こり、農作物の残留農薬の問題、酸性雨、光化学スモッグ、アスベスト、ヒートアイランド現象、次から次へと我々の生活に困難が降りかかってくるような、そんな状況が毎日続いている。日本では2007年1月に映画『不都合な真実』が公開され、地球温暖化の問題がクローズアップされ、各国の温暖化対策の遅れが指摘されている。一方で日本においては、これまで利潤追求を第一としていた企業も、最近では、「エコ」「環境にやさしい」がキーワードとなり、環境産業が業績を伸ばすようになってきている。いずれにせよ、「持続可能な社会」を目指すのであれば、ここ数年が最後のチャンスではないかと言われており、今この問題を教室で話題にすることはまことに自然な成り行きではないかと思われた⁸。

しかしこうした環境問題意識の高まり、あるいは「エコブーム」は、本当に全世界的な動きなのであろうか。また私たちが目にしている問題が、環境問題の全てなのであろうか。留学生の出身国、出身地では、どんな環境問題が存在しているのか。若い彼らはそうした問題や全世界的環境問題について、どんな意識でいるのか。環境問題以上に今私たちが問題にすべきことはないのか。これらの点を一つ一つ明らかにしていきたいと考え、今年度の授業計画を立てることにした。

5 授業の流れ

授業は2007年4月13日から7月6日の毎週金曜日、第4時限目に行われた。授業回数は12回。4月13日は野川公園オリエンテーリングを行い、自己紹介をしたり、センター近くの町並みを案内したりした。4月20日に今年度の授業内容を「各国における環境破壊」とし、まず筆者が日本における環境破壊の例として、水俣病、排ガス問題、ゴミ問題などを挙げて説明した。また環境破壊に関連する用語（日本語）をリストにして配布した。次に発表の形式、発表の順番、使用できる機器などについて説明した。各留学生の発表の順番とタイトルは表1のとおりである。授業には23カ国から33名の学生とTOFSIAの日本人学生数名が参加した。

⁸ 旭硝子財団（2007）による「環境危機時計」（「まったく不安がない」を0時1分とし、「環境悪化による人類滅亡」を12時とする）は15年前から毎年世界規模のアンケート結果を集計しているが、昨年より14分進み、2007年度9時31分となり、調査開始以来、悪化し続けており、この1年間の悪化が最も早いものとなった。回答者の意識の変化が見て取れる。

表1 2007年度多文化コミュニケーション（Aクラス）発表タイトル一覧

DATE	COUNTRY	TITLE OF PRESENTATION
5/18	Mongolia	Copper and gold mining industry and environmental destruction
	Vietnam	Environmental destruction in Vietnam forests
	Bulgaria	Environmental destruction in Bulgaria caused by illegal building
	Indonesia	Mud flood in Porong, Sidoarjo: Marine and land exposure and air pollution
5/25	Uzbekistan	Aral Sea Problem
	Peru	Environmental problems in Peru
	Romania	Why do people in Romania not care about nature anymore
6/8	India	Ganga river pollution
	Macao	Yellow sand (Asian dust) phenomenon in China
	Thailand	Destruction of mangrove forests in Thailand
	Singapore	River pollution and the cleaning up the rivers
6/15	Turkmenistan	Caspian Basin Alert: Environmental impacts
	Uganda	The status of forests in Uganda
	Russia	Decreasing forests in Russia inherited from the USSR
	Cambodia	Forest destruction in Cambodia
6/22	Nepal	Environmental concerns in Himalayas of Nepal
	Malaysia	Water, Earth and Air
	USA	Air pollution in Texas
	Iran	Air pollution in Teheran
6/29	Korea	Contamination by Saemangum Tideland Reclamation Project
	Fiji	Destruction of the coastal lines in Fiji
	Nigeria	Ecological effects of oil exploitation in Nigeria's Niger-Delta
	Azerbaijan	Environmental problems in Azerbaijan

同出身国からの留学生は一緒に発表することになるが、最後に行なわれる高校での発表は別々にしなければならないことを知らせ、個人レベルでの意識を持つように促した。

一発表は10分を目安とし、質疑応答、討議などを加えて20分程度とした。発表者以外の留学生（つまり聞き手）には全ての発表に対して、「内容、口頭発表の仕方、提示の仕方、その他感想」などについてのコメントシートを記入させ、トピックへの意識を高めるように努めた。また回収したコメントシートは筆者が目を通した後、

発表者に手渡して、フィードバック内容を確認する作業を促した。

富士山ハイキング（6月1日）の前の週には、前掲 TOfSIA 学生に富士山紹介の発表を行なってもらった。これは授業に参加している日本人学生にも英語での発表を経験させることと同時に、富士山が重大なゴミ問題を抱えていて、それが世界遺産登録へのネックとなっていることを留学生にも認識してもらい、ハイキングに出かけた際に、ゴミを持ち帰るようにさせる意識を持たせるためでもある。

発表に際しては、「最終回の高校との交流会の会場には、PC（パソコン）もスクリーンもないので、印刷物や写真などで準備したほうが良い」と知らせたが、ほぼ全ての発表者が USB メモリーを持参して、PC を用いて発表を行なった。

6月15日には、武田（2007a）を参考に、「真実か誤りか」というクイズを出題した。環境問題の既成事実として多くの人が疑問を抱いていない「常識」についてあえて質問し、インターネットなどで調べて次週までに解答するように求めた。

その質問の概略は、次のようなものである。（実際には英文を併記し、振り仮名もつけた。）

環境問題に関して、信頼できそうな話がたくさんあります。次の意見のうち、ひとつを選んで、あなたの考えを理由といっしょに、書きなさい。答える前に、インターネットなどで情報を集めること。

- (1) ダイオキシンは猛毒である。
- (2) 北極の氷が解けているので、海水面が上昇している。
- (3) もしわたしたちが自動車かわりに歩き、電灯を消して、エアコンを消せば、貯金ができて、石油の消費量が減り、地球温暖化防止に協力できる。
- (4) 森林は二酸化炭素を吸収する。
- (5) 水素自動車は、二酸化炭素の排出がない、環境に優しい車である。

これらの事項は武田（2007a）によれば、科学的根拠を十分に持たない誤った認識という⁹。これらに対する留学生の解答結果は、次項に記す。

最終回である7月6日には、東京都立狛江高等学校に招待され、茶道と和琴を鑑賞した後、ほぼ同数の高校生を交えた小グループに分かれ、「各国の環境破壊」に関

⁹ その論拠については、著書あるいは著者ウェブサイト <http://takedanet.com/> を参照のこと。

する発表と意見交換を行なった。集まった高校生は、国際交流に関心のある有志で、留学生とほぼ同数だが、女子が8割程度である。毎年同じ時期に訪問しているの、高校全体にも周知されており、ウェブ上にも紹介されている¹⁰。

毎回のことであるが、このイベントは留学生の側も高校生の側も良い刺激を受けるらしく、終了時間が来てもなかなか別れることができない。今回は環境問題を主なテーマとしているため、高校生からは「日本でも同じような問題がある」「一国の問題でも、世界規模で考えなければだめなんですね」といった意見が聞かれた。帰りのバスの中でも留学生は興奮して語り合い、「またこういう機会を持ちたい」と語る者が多かった。この日が最終回の授業であるので、授業に対するフィードバックシートを提出することで期末レポートの代わりとした。ここでは

- (1) 同級生による他国の事例発表からどんなことを学んだか。
- (2) 授業で学んだ環境問題についてどんなことを考えたか。
- (3) 狛江高等学校との交流会で感じたことは何か。

の3点について、A4用紙1枚程度で解答するように指示した。このフィードバックの内容については以下の項目7において検討する。

6 「真実か誤りか」に対する留学生の意見

6月15日に宿題とした「真実か誤りか」に対する解答をまとめたものが表2である。解答者は33名だが、複数解答した者がいたので、総数は36となっている。また受講生33名のうち、理科系学生は19名、文科系学生は14名だった。

解答傾向を見てみる。まずダイオキシンについては、武田(2007a)同様、池田(2006)も社会の過剰反応ぶりを批判しているが、この設問を選んだ6名のうち、「間違いである」と答えた学生はいなかった。第二設問に対し、「アルキメデスの(浮力の)原理から北極氷山の融解は海面上昇にはつながらない」と明確に反論したのは理科系の学生1名だけだったのに対し、9名の学生が「北極氷山が溶け続ける出して海面上昇が起きている」などと同意した解答をした。一方、第三設問では、「世の中はそう単純には行かない」「原始時代に戻ることはできない」「私たちが貯金しても、その金がどう使われるか不明である」といった反論が6名と多く見られた。また第四設問については光合成を説明し、単純に「正しい」とする者もいたが、「森林も状況

¹⁰ 昨年度の記録を http://www.annie.ne.jp/~komako/2006/2006_kouryuukai.htm で見ることができる。

によっては効率良く二酸化炭素を吸収するとは限らない」という限定的な解答を寄せた者が4名いた。また最後の水素自動車については、燃料とする水素を生成する過程で、二酸化炭素も作られると指摘した学生が3名いた。総数として、正しいと答えた者が17名、誤りと答えた者が11名、どちらか明確でない者が8名であった。

表2 「真実か誤りか」5設問に対する解答（カッコ内は理科・分科系別人数）

N=36	(1) ダイオキシンは猛毒である。	(2) 北極の水が解けて、海面上昇が起きている。	(3) 個人が省エネに努めれば、貯金ができ、石油消費量が減るので、温暖化防止に役立つ。	(4) 森林は二酸化炭素を吸収する。	(5) 水素自動車は環境に優しい。	計
真実だ	4 (1, 3)	9 (5, 4)	1 (0, 1)	2 (1, 1)	1 (0, 1)	17 (7, 10)
間違っている	0	1 (1, 0)	6 (3, 3)	1 (1, 0)	3 (3, 0)	11 (8, 3)
どちらとも言える	2 (1, 1)	1 (0, 1)	1 (1, 0)	4 (1, 3)	0	8 (3, 5)
計	6 (2, 4)	11 (6, 5)	8 (4, 4)	8 (3, 4)	4 (3, 1)	36 (18, 18)

環境問題の諸現象は、科学的理解が不可欠であるから、理科系学生に有利な質問だったと言えるかもしれない。たしかに理科系学生のほうが世間に広まっている言説に対して若干批判的な視点を有しているようにも思える。しかし北極氷解による海面上昇に対する解答にあるように、理科系学生と文科系学生の差が認められにくいものもある。さて、これらの結果を解釈するのは難しい。その場で意見を聞いたのではなく、数日間調査の時間を与えての解答であるから、彼らがいかに、何を調査したのかは不明であるし、理解がどう変わったかも明らかではない。来年度以降の留学生や日本人学生との比較調査がなされても良いだろう。

7 授業フィードバックからみる効果と反省点

32名が最終レポートを提出したが、ほとんどの者がびっしりと熱心に書き込んでいた。いくつか紹介する（和訳は筆者）。

- 「多くの発表を興味深く聞くことができたが、その理由は、まず全ての参加者がある国の問題について同時に考え、いつでも自分の意見を自由に表明できたこと、第二に、発表の仕方に個性が出ていたこと、第三に、各国の問題を比較検討できたこと、さらに、最も大事なことは、世界中で様々な問題が人間の軽率な行為によって生じていること、それらを感じる事ができたからです」
- 「少しでも自分たちの国が抱える環境問題を地球規模に考え、自然と社会に対する気づきを促すという意味で、重要な経験をする機会を得られた。（中略）

我々は清掃やリサイクル活動を進めるのではなく、私たち自身の気持ちと社会的行動を変えることによるのみ、環境破壊を食い止めることができる。そのために重要なのは教育だと思う」

- 「各国の文化や習慣よりも、各国の環境問題のほうが面白いと思う。なぜなら、文化や習慣の話聞いても、『それは面白い』で終わってしまうから。どの環境問題も私にとっては身近に感じられた」
- 「各国の環境問題の背景に、各国の政治や経済のシステムの問題があることが興味深かった」
- 「残念なことだけれど、環境問題に対する即効の解決策はないんだなあと思った」

内容的には授業内容を高く評価したものが多かったが、このレポートも評価のための提出物であるから、それは当然のことである。しかしその制約を考えた上でもなお受講生が自説を展開しようとする姿勢に感心させられた。ここにあるように、各国のさまざまな状況下で、さまざまな環境破壊が生じている現状が報告されたが、そこで共通に指摘された問題には、急激な経済的変化、極端な経済性優先の社会などがあり、教室で共有された認識は、失われてからわかる自然の偉大さ、重要さなどである。また国によっては、搾取する大手企業、それと密接に関わる政府、政府関係者、政治家といった富める者と搾取される地元民といった貧しい者の対立構造や、先進国、消費大国への際限のない輸出による自然破壊も指摘された。

一方、授業内容に対する批判もなされた。

- 「環境保護には金がかかるが、食糧不足や貧困という問題を背負っている人々、国にとっては、そんな余裕はないのが実情だ。(中略) 環境問題が重要なことはわかるが、このクラスでは各国紹介を通じて、日本と自分たちの文化の違いを考えたり、どうやって日本でうまく、楽しく暮らしていくかということを考えたりするほうがいいと思う」
- 「時として単なる文字の羅列の発表もあり、つまらなかった。自分の発表もつまらなかった。自分たちでトピックを考えるほうが良かったのかもしれない」

これらの指摘はもっともである。たしかにこれまでの文化紹介のクラスに比べ、筆者自身、重苦しく、だるく感じられたこともあった。笑える場面は少なく、質疑応答にも、学生間でジョークのやり取りが行われることは少なかった。1週間の最

後の授業の内容としては、最適とは言えなかったのは確かである。今年には筆者のマンネリ化してきた授業内容や環境問題への強い危機感から、筆者が一方的にトピックを環境破壊に絞り込んでしまった。しかしここで指摘されているように、来年度以降は、「環境問題」を含むいくつかのトピックの中から、発表者に選ばせる方法が良いかもしれない。

8 まとめ

この報告書を作成していた10月12日、本年度のノーベル平和賞に国際連合の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」とアル・ゴア前米副大統領が選ばれ、世界の環境問題に対する関心はますます高まってきたようである。環境破壊、特に地球温暖化を後押しするような環境破壊は悪であるという結論は万人が認めたものであり、京都議定書で決められた排出ガス削減目標は当然実行されなければならないとする意見が日本においては圧倒的であるように思われる。しかしこのノーベル賞受賞決定に対し、世界各地から異論が唱えられたのも事実であるし、京都議定書の方向性や地球温暖化に対する我々の認識は間違っていると主張する研究者も少なくない（ロンボルド、2003；池田、2006；武田、2007a、2007b）。我々が環境問題に関心を持つことは大切であるが、そこでなされている議論がどういう根拠に基づくものであるのかを見極める目を同時に持つ必要がある。

現在の環境問題、特に地球温暖化防止に対する私たちの姿勢は、マスコミによる危険を煽り立てるような報道や国内外の政治的決断によって左右されているところが強いという気がする¹¹。私たちには世界の科学者たちの大量かつ詳細な研究結果に直接触れたり、客観的な判断を下したりすることは難しい。ところがそれを正確に解釈し、私たちに伝えるべき政府や報道機関が、健全に機能しているとは思えない現状がある。また科学を学んだ者の中から、庶民に科学的知見を解説する者が生まれてこないことにも問題があろう。環境問題について、私たちが強く関心を持つことは重要であるが、どのような現実認識を持ち、いかに行動するかについては、慎重であるべきだろう。

こうした様々な見解について議論するという活動も含め、環境問題自体を多言語多文化社会で、あるいは多くの国や地域から集まる留学生と日本人学生を対象とす

¹¹日本経済新聞社（1992）を見ると、「地球危機」騒動に関して当時のマスコミは、今以上に冷静な判断を下していたようにも思える。

る多文化コミュニケーション授業で扱うことについては、もう少し回数を経てから、あるいは同様の活動をしている人たちとの意見交換の中で検討すべきだろう。現実社会を見つめつつ、建設的かつ有益な討議の場となるべきトピックを選択し、実行することは、決してたやすいことではないが、以上のことを念頭に置きつつ、今後の授業に生かしていきたい。

引用文献

池田清彦 (2006)『環境問題のウソ』筑摩書房

武田邦彦 (2007a)『環境問題はなぜウソがまかり通るのか』洋泉社

武田邦彦 (2007b)『環境問題はなぜウソがまかり通るのか2』洋泉社

日本経済新聞社(編)(1992)『いやでもわかる環境問題』日経

文部科学省高等教育局学生支援課留学生交流室(2007)『我が国の留学生制度の概要：受け入れおよび派遣』

ロンボルグ、ビョルン(2003)『環境危機をあおってはいけない』山形浩生訳 文芸春秋社

Weaver, G. (1986) in R. M. Paige (ed.) Cross-cultural Orientation: New Conceptualizations and Applications. University Press of America.

(インターネット資料)

旭硝子財団(2007)『第16回「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート調査結果』

<http://www.af-info.or.jp/jpn/questionnaire/enquete2007/release2007.pdf>

脇田里子(2003)「多文化コミュニケーション」での授業改善 第2回大学教育研究会 京都大学 高等教育教授システム開発センター 報告

http://oriko.cup.com/PDF/0303_kyoudaiFD.pdf

Revision and development of a “Multicultural Communication” class for pre-undergraduate students at JLC-TUFS

MIYAGI, Toru

The objectives of this paper are to discuss and report on implementation, evaluation and revision of the contents of a class called “Multicultural Communication”, in which a new topic about environmental destruction in different countries was introduced to the class.

The main activity of the class so far, has been to introduce ‘wonderful’ cultural aspects of the students’ mother countries to other nationals. But the author points out that there are some potential pitfalls that might create misunderstandings about the culture introduced by the presenter who may introduce stereotypical aspects of one culture. By introducing activities based on “introductions to many cultures” we can enjoy a variety of many different cultures with humor in a pleasant atmosphere. However, we also often notice that the world does not improve without discussing serious issues. In order to mitigate this concern, the author tried to put a new topic of discussion “environmental destruction seen in my country” into the class activities this year, because the issue has been become a world-wide concern.

The class was composed of thirty three international students from twenty three countries. Although each country has unique environmental problems, many of which did not seem to be related to other countries’ problems, the class members gradually realized that environmental issues in one country are often deeply linked to political and economical status in other countries.

Feedback from the students indicated that the presentations were instructive and meaningful, although sometimes the audience got somewhat depressed. In order to revise the content of the class next year, it is proposed that both the positive and negative sides of each culture should be dealt with.